

Hermann Gottschewski

放送大学文教学習センターの面接授業『演奏論(2)『魔王』を中心に』

第三～四回目：演奏者の基本的な選択:移調、基礎テンポ等(著名な演奏の比較)

四つの「声」(語り手、父、子、魔王)がどのように表現されるか

授業のホームページにアクセスするための QR コード



演奏における「選択」項目

複数の演奏者を比較する場合、それぞれの小節などの演奏問題があり、それに集中する方法もあるが(それは来週以後の授業で扱いたい)、まずは演奏全体においての基本的な「選択」がいくつある。それについて今回分類したいと思う。

以下は naxosmusiclibrary と youtube からできるだけ多くの録音を集め、実際の演奏の事例をもとに調査した結果である。ただし素人と判断されるものを除外した。また歌手もピアニストも同じコンビで複数の録音がある場合には、原則的にその中の一つのみを選び、調査の対象とした。結果的に 71 件の録音が対象となった。

- ① 一人で歌うか、複数の歌手で歌うか
 - Ⓐ 斉唱で歌われる場合は実際にあるが、録音にはほとんど見当たらない
 - Ⓑ 斉唱ではなく、詩の中の「話し手」を複数の歌手に分担して歌うことはよく議論されるが、実際にそのように歌っている録音は極めて少ない

- ② 歌手は女性なのか、男性なのか

ゴチェフスキが確認した 71 件のうち、31%は女性、69%は男性であった

- ③ 伴奏に使われる楽器(編成)。特に現代のピアノか、時代のピアノか。

さまざまなアレンジメント(特にオーケストラ伴奏の録音が多い)があるが、今回はピアノ以外の伴奏が付いている録音を除外した。ゴチェフスキが確認したピアノ伴奏の 71 件のうち、9 件は時代のピアノ(フォルテピアノ)、62 件は現代のピアノ。録音が新しいほど、時代のピアノを使っている事例が増える。

- ④ 何調で歌うか

シューベルトの歌曲は、まれな例外を除き、高い男声または女声(テノールまたはソプラノ)の歌えるような高い調で記譜されているが、だれでも歌えるように、より低い調の楽譜も出ている。「魔王」に関して、シューベルトの自筆譜と初版楽譜はト短調となっているが、一音低いヘ短調、短3度低いホ短調、4度低いニ短調の楽譜も出版されている。優れている伴奏者は楽譜と別の調でも伴奏できるので、その4調以外の調で歌っている事例もある。ゴチェフスキが確認した 71 件の内

- ④ a オリジナルのト短調で歌っているのは 18 件
- b 半音下げて嬰へ短調で歌っているのは 3 件
- c 全音下げてへ短調で歌っているのは一番多く、31 件
- d 短3度下げてホ短調で歌っているのは 17 件
- e 4度下げてニ短調で歌っているのは 2 件

があった。ただし耳で判断したものなので、判断ミスもあるかもしれない。特に時代のピアノでは楽器のピッチが現代のピッチより低い場合もあるので、ピッチが低いのか、移調しているのか、確実に判断できない場合もある。

⑤ 何語で歌うか

特に 19 世紀にはドイツ語以外の言語（翻訳）で歌う事例も多かったが、20 世紀になってからそう事例が徐々に減り、録音された演奏では稀である。今回は外国語で歌っている事例を除外した。

⑥ 基礎テンポの選択

テンポは演奏中に変化する場合もあるので、特定の録音の「基礎テンポ」を定めるのが簡単ではない場合もある。今回の調査ではピアノの出だしのテンポのみを測った。第一小節は比較的遅めに始まる録音もあるので、今回は 2～3 小節目のかかった時間を定め、そこから四分音符あたりのメトロノームテンポを計算した。（「メトロノームテンポ」は一分あたりの拍数で表現される。例えばシューベルトの楽譜の冒頭に書かれた「152」—それはシューベルト自身によるものなのか、出版社が足したものなのか分からない—は「一分に 152 の四分音符」を意味し、そこから二小節、つまり 8 拍分を計算すれば 3.16 秒になる。）上記の 71 件の結果としては

- ④ a 平均のテンポは 159 で、シューベルトの指示より若干速い。
- b 一番遅いテンポは 123 だったが、他の 70 件はすべて 142 から 185 までの範囲に収まっている。
- c 71 件のうち 55 件（77%）は $152 \pm 10\%$ の範囲に入る。そこから逸脱するケースは上記の非常に遅い一件を除き楽譜の指示より速い演奏である。

つまり楽譜のテンポ指示は、シューベルト自身の指示かどうか分からないにしても、演奏者によっておおよそ妥当なものとして受け入れられている。

⑦ 登場人物の声の表現

「魔王」が一人の歌手によって歌われる場合、語り手、父、息子、魔王のそれぞれの声を発声法によって表現し分けるかという問題はこの歌に関しての根本的な選択項目の一つである。つまり歌手がそれぞれの人物に「変化する」のか、それをそのままの自分の声で表現するかという問題である。それについてさまざまな意見があり、歌手によって解決策がある。